

てんでんこ

ルイ・アームストロングの「この素晴らしき世界」を聴いた。何としみじみとした“喜び”に満ちた歌だろう。

この世に“悲劇”があるとしたら、それは多分自然対人間の構図の中ではなく、いつも人間対人間の葛藤の中で生まれるのだ。

あの日以後“てんでんこ”という言葉をよく耳にした。それは、ある意味恐ろしい状況だ。もし津波に追われ山へ逃げていく途中、歩けぬ老婆を見捨てねばならぬとしたら、現実にはもっと悲惨な状況もあったであろう、それがその状況が“悲劇”というものでは無いだろうか。絆の確認は人間性というものを信じさせるものだが、究極の選択の中で人は何を守るのか、何を捨てるのか。

“喜劇”がもし、“悲劇”と対の概念とすれば、この世の殆どの人事は“喜劇”だ。私たちは、只こうして日常を別に大げさでなく淡々と過ごしていても、その何気なさが喜びに満ちた“この素晴らしき世界”なのだ。